

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 張 善 実

論 文 題 目 日本語の V-N 型漢語動詞の語構成論的研究  
— 離脱・帰着を表す動詞を中心に —

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学准教授 杉村 泰

委 員 名古屋大学教授 玉岡 賀津雄

委 員 名古屋大学教授 楊 暁文

委 員 名古屋大学准教授 鷺見 幸美

## 論文審査の結果の要旨

本論文は日本語の漢語サ変動詞のうち、前項の動詞的要素 V (Verb) と後項の名詞的要素 N (Noun) が格関係で結合された V-N 型漢語動詞の意味的・構文的特徴について論じたものである。本論文では「離陸する」、「着陸する」など離脱・帰着を表すものを分析の対象として、(i) V-N の内部構成、(ii) 「(V-N) する」の外部構成、(iii) N'P と N の意味関係の 3 つの側面から分析することにより、「V-N 型漢語動詞」の自他性や格関係の特徴を明らかにした。以下、本論文の概要と評価について述べる。

### [本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で 6 章からなる。

「第 1 章 序論」では、V-N 型漢語動詞に関する研究の背景と目的について言及し、以下のように研究の指針を示している。

- ① (i) V-N の内部構成、(ii) 「(V-N) する」の外部構成、(iii) N'P と N の意味関係の 3 つの側面から分析を行う。(本論文でいう N'P とは、V-N 型漢語動詞が要求する項 (NP) のうち内項 (internal argument) を指す。)
- ② N'P と N について、両者がそれぞれ〈移動物〉、〈離脱点〉、〈帰着点〉のいずれを表すかを見ることにより、両者が「下位語—上位語」(包摂)、「所有者—所有物」(所有)、「所属先—所属物」(所属)のいずれの関係にあるのかを検討する。これにより、従来指摘されている「包摂関係」、「所属関係」、「前提関係」について再考する。
- ③ 動詞と V-N 型漢語動詞の対応を明らかにする。
- ④ 各 V-N 型漢語動詞において、「～ガ ～ヲ/ニ/カラ (V-N) する」全体の持つ構文的な自他性や格関係と、「(V-N)」内の自他性や格関係を分けて分析し、両者の関係を明らかにする。
- ⑤ V-N 型漢語動詞のうち、どのような動詞がどのような項を取るか。項を取る場合、その項と N はいかなる意味関係にあるのかを明らかにする。

「第 2 章 先行研究」では、V-N 型漢語動詞の先行研究の成果と問題点を指摘し、本研究の理論的枠組みを提示している。先行研究では、V-N 型漢語動詞が文中にさらに目的語を取るか否かについて、文中に取る目的語は語内部の語構成と関わると述べている。しかし、いずれも語内部の名詞的要素 (N) に重点が置かれており、動詞的要素 (V) にはあまり言及されていない。これに対し、本論文では、V-N 型漢語動詞の統語機能を解明するには、語構成論的観点から、語内部の V と N、および語外部において動詞が要求する N'P の三者の関係に着目する必要があることを主張している。また、先行研究で指摘されている「包摂関係」、「所属関係」、「前提関係」の分類基準が不明確であることを指摘し、N'P と N の意味関係として、新たに「下位語—上位語」(包摂)「所有者—所有物」(所有)、「所属先—所属物」(所属)の 3 つの関係を設定した。さらに、N'P と N の意味役割として〈移動物〉、〈離脱点〉、〈帰着点〉を設定し、今挙げた 3 つの関係と合わせて分析することにより、V-N 型漢語動詞の意味的・構文的特徴が明確に記述できることを主張している。

## 論文審査の結果の要旨

「第3章 離脱を表す V-N 型漢語動詞」では、離脱を表す「除 N する」、「離 N する」、「脱 N する」、「授 N する」について分析している。これらの動詞はいずれも主体や対象がある場所を離脱し、遠心的な方向に向かうことを表し、構文的に〈移動物〉と〈離脱点〉を表す2つの名詞が想定される点で共通した特徴を持つ。このうち、「除 N する」に関しては、本動詞「除く」には「除去」と「除外」の意味があるのに対し、「除 N する」には「除去」の意味はあるものの「除外」の意味はないことと、本動詞「除く」にはない「退く」の意味があるとしている。その上で、「除 N する」の内部構成、外部構成、N'P と N の意味関係を分析し、「除 N する」を「除草類」、「除籍類」、「除隊類」の3つの異なるタイプに分類している。このうち、「除草類」については N'P に「(花壇の) 雑草を」(〈移動物〉、N の下位語) を取ることもあれば、「花壇を」(〈離脱点〉、N の所属先) を取ることもあるとして、対象を表すヲ格と場所を表すヲ格との接点が見られることを指摘している。また、「除籍類」については「造反者を除籍する」のように〈移動物〉は取るものの、〈離脱点〉は取らないという点で「除草類」とは異なることを指摘した上で、「所有者(党) - 所有物(党員リスト)」という縦軸と、「所属先(離脱点) - 所属物(移動物)」という横軸からなる二次元的な意味関係を想定することにより、N'P (「造反者」など) と N (「(党) 籍」など) の関係を明確に説明している。さらに、「除隊類」については、内部構成においては「N を/から退く(除く)」という意志的自動詞の関係で結合されており、外部構成においても意志的自動詞用法として用いられる点に特徴があるとしている。その他、「離 N する」、「脱 N する」、「授 N する」についても、内部構成、外部構成、N'P と N の意味関係を分析して、N'P と N が〈移動物〉なのか〈離脱点〉なのか、両者の関係が「下位語 - 上位語」なのか「所属先 - 所属物」なのか「所有者 - 所有物」なのかを見ることにより、各 V-N 型漢語動詞の意味的・構文的特徴を明らかにしている。

「第4章 帰着を表す V-N 型漢語動詞」では、帰着を表す「帰 N する」、「着 N する」、「入 N する」、「受 N する」について分析している。これらの動詞はいずれも主体や対象がある場所に到達し、求心的な方向に向かうことを表し、構文的に〈移動物〉と〈帰着点〉を表す2つの名詞が想定される点で共通した特徴を持つ。このうち、「受 N する」に関しては、本動詞「受ける」が10の意味に分類されるのに対し、「受 N する」はこのうちの4つの意味に対応するとしている。その上で、「受 N する」の内部構成、外部構成、N'P と N の意味関係を分析し、「受 N する」を「受診類」、「受注類」、「受賞類」、「受傷類」の4つの異なるタイプに分類している。このうち、「受診類」は受け手 A が与え手 B に対して意図的に N で示される行為(「試験」など)を要求し、その結果 N で示される行為が主語に及ぶことを表し、「受注類」は受け手 A が与え手 B から意図的に発せられてきた行為(「注文」など)に応じ対処することを表し、「受賞類」はある事態(「賞」)が主語の意志とは無関係に一方的に主語のところに移動してくることを表し、「受傷類」はある事態が主語の意志とは無関係に、一方的に主語のところに降りかかってくることを表すとしている。その他、「帰 N する」、「着 N する」、「入 N する」についても、内部構成、外部構成、N'P と N の意味関係を分析して、N'P と N が〈移動物〉なのか〈帰着点〉なのか、両者の関係が「下位語 - 上位語」なのか「所属先 - 所属物」

## 論文審査の結果の要旨

なのか「所有者—所有物」なのかを見ることにより、各 V-N 型漢語動詞の意味的・構文的特徴を明らかにしている。

「第5章 離脱・帰着を表す「出 N する」」では、離脱と帰着の両方の意味を表す「出 N する」を例に分析している。「出 N する」は、「出国する」（国から出る）のように N が〈離脱点〉を表す場合と、「出社する」（会社に出る）のように N が〈帰着点〉を表す場合との二通りある点で特徴的である。また、「出 N する」の「出」は、「出場する」（場に出る）のように自動詞的に機能する場合もあれば、「出題する」（問題を出す）のように他動詞的に機能する場合もあれば、「出血する」（血が出る、血を出す）のように他動詞的にも自動詞的にも機能する場合もあるため、「出 N する」の内訳は複雑な様相を呈している。これに関しても、本論文では内部構成、外部構成、N'P と N の意味関係を分析して各表現の下位類を抽出し、N'P と N が〈移動物〉か〈帰着点〉か〈離脱点〉か、両者の関係が「下位語—上位語」か「所属先—所属物」か「所有者—所有物」かを見ることにより、「出血類」、「出国類」、「出場類」、「出漁類」、「出頭類」、「出題類」、「出店類」、「出庫類」、「出展類」の9つに分類できることを指摘している。

「第6章 結論」では、第3章から第5章で行った分析をもとに、離脱を表す「除 N する」、「離 N する」、「脱 N する」、「授 N する」、「出 N する（1）」と、帰着を表す「帰 N する」、「着 N する」、「入 N する」、「受 N する」、「出 N する（2）」の内部構成と外部構成を整理し、N と N'P に関して、〈移動物〉、〈離脱点〉、〈帰着点〉と「下位語—上位語」（包摂）、「所有者—所有物」（所有）、「所属先—所属物」（所属）の関係において①～④のパターンがあることを明らかにしている。

- ① N が〈離脱点〉で、N'P も〈離脱点〉の場合、N'P と N は「下位語—上位語」（包摂）の関係と「所有者—所有物」（所有）の関係にある。

例1：太郎が 自民党を 離党する。 例2：太郎が 会社を 離職する。  
N'P: 〈離脱点〉 N: 〈離脱点〉 N'P: 〈離脱点〉 N: 〈離脱点〉  
(下位語) (上位語) (所有者) (所有物)

- ② N が〈帰着点〉で、N'P も〈帰着点〉の場合、N'P と N は「下位語—上位語」（包摂）の関係と「所有者—所有物」（所有）の関係にある。

例3：選手団が 日本に 入国する。 例4：派遣社員が 新しい会社に 着任する。  
N'P: 〈帰着点〉 N: 〈帰着点〉 N'P: 〈帰着点〉 N: 〈帰着点〉  
(下位語) (上位語) (所有者) (所有物)

- ③ N が〈移動物〉で、N'P が〈移動物〉の場合、N'P と N は「下位語—上位語」（包摂）の関係と「所有者—所有物」（所有）の関係にある。

例5：花子が まな板の菌を 除菌する。 例6：党執行部が 造反者を 除籍する。  
N'P: 〈移動物〉 N: 〈移動物〉 N'P: 〈移動物〉 N: 〈移動物〉  
(下位語) (上位語) (所有者) (所有物)

## 論文審査の結果の要旨

- ④ Nが〈移動物〉で、N'Pが〈離脱点〉ないし〈帰着点〉の場合、N'PとNは「所属先—所属物」(所属)の関係にある。

例7: 花子が まな板を 除菌する。 例8: 花子が 丸もちを 着色する。  
N'P: 〈離脱点〉 N: 〈移動物〉 N'P: 〈帰着点〉 N: 〈移動物〉  
(所属先) (所属物) (所属先) (所属物)

このように、本論文では語構成論的観点から、語内部のVとN、および語外部において動詞が要求するN'Pの三者の関係に着目することにより、V-N型漢語動詞の意味的・構文的特徴を詳細に分析し記述している。

### [本論文の評価]

本論文は、V-N型漢語動詞の意味的・構文的特徴について、(i)V-Nの内部構成、(ii)「(V-N)する」の外部構成、(iii)N'PとNの意味関係の3つの側面から詳細に分析を行い、V-N型漢語動詞の自他性や格関係を明らかにした優れた論文である。とりわけ、以下の各点において審査委員から高く評価された。

- 1) 研究のデザインが綿密で、極めて論理的に論証されている。
- 2) 先行研究について十分な検討が加えられ、これまでの研究の成果と問題点が明確に指摘されている。かつ、先行研究の記述を超えた極めて綿密な記述がなされている。
- 3) V-N型漢語動詞の意味的・構文的特徴を見るのに、(i)V-Nの内部構成、(ii)「(V-N)する」の外部構成、(iii)N'PとNの意味関係を分析することから体系的な記述が可能であることを示している。
- 4) N'PとNについて、それぞれ〈移動物〉、〈離脱点〉、〈帰着点〉のいずれを表すか、両者の関係が「下位語—上位語」(包摂)、「所有者—所有物」(所有)、「所属先—所属物」(所属)のいずれであるのかを検討することにより、「(V-N)する」が取る項の性質の違いを詳細に記述している。
- 5) 各V-N型漢語動詞において、「～ガ ～ヲ/ニ/カラ (V-N)する」全体の持つ構文的な自他性や格関係と、「(V-N)」内の自他性や格関係の対応について明らかにしている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

- 1) 分析の対象が離脱・帰着を表すV-N型漢語動詞に限られており、V-N型漢語動詞あるいは漢語動詞全体の体系化には至っていない。
- 2) 「(V-N)する」の多義性と「(V-N)」のVの意味について、さらなる対応関係を見る必要がある。
- 3) いわゆる対象を表すヲ格と場所を表すヲ格との接点について、V-N型漢語動詞に限らず、動詞論全体の中で議論する必要がある。

このように本論文には、不十分と思われる個所も見られるものの、これらの指摘は本研究

## 論文審査の結果の要旨

が漢語動詞の体系化のみならず、動詞全体の体系化につながることを示唆したものであり、本研究がさらなる研究成果につながる重要な位置にあることを指し示すものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。